

タイトル : Doktor Proktors Prompepulver

(仮題 : プロクトル博士のおなら薬)

著者名 : Jo Nesbø (ヨー・ネスビュ)

出版社名 : Aschehoug (ノルウェー)

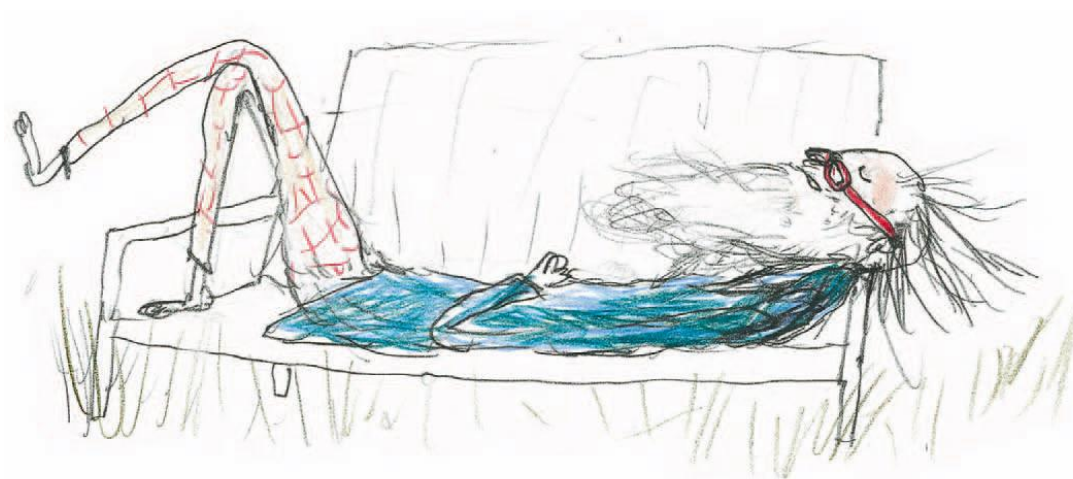
訳者名 : 枇谷 玲子

ページ数 : 208 ページ

出版年 : 2007 年

プロクトル博士は……

おだやかで優しいけど、どこか風変わりな博士。近所のブッセという少年とリーセという少女とタッグを組み、世界一強烈なおなら薬を発明した。やっと博士の夢がかなおうとしたところで、暴れん坊の双子の兄弟とその父親が、博士のおなら薬を横取りしようとたくらみだし……。



☆ テーマ ☆

- ・ 創造力というものが人に勇気を与えること
- ・ 自分らしくあることの大切さ

☆ 本作の魅力 ☆

- ・ 個性的で明るい登場人物
- ・ ロアルド・ダールを髣髴とさせるよどみない文章
- ・ ウィットあふれるゆかいな会話
- ・ あたたかくユーモラスな語り

☆ あらすじ ☆

ノルウェーの南東のアーケシュフースは、一見するとのどかな町に思えるかもしれない。でもこの町に暮らすプロクトルという博士の実験室では、おなら薬が爆発の時を迎えようとしていた。プロクトル博士とは、リーセという女の子のご近所さんで、どこか風変わりなところのあるおじいさんだ。

リーセの家の裏手にはプロクトル博士が、そして右隣にはリーセの仲良しの友達が暮らしていた。その友達が遠くの町に引っ越してしまい、リーセが悲しんでいると、その家に赤毛の小さな太っちょの男の子が引っ越してきた。男の子はブッレといい、見た目だけでなく中身まで個性的な子だった。

ブッレはどんなピンチも豊富な知識と知恵で乗り越えて行く。読書が趣味で、中でも一番のお気に入りの本は『この世にいてほしくない動物』というものだった。その本の中には、アナ・コンダという大きなおばけ蛇が載っていた。その頃のブッレは、まさかこのアナ・コンダが、のどかなアーケシュフースの町にあらわれるとは夢にも思っていなかった。

リーセとブッレはクラスも一緒に、すぐに友達になった。しかし、2人を脅かす存在が。町で一番大きな家に暮らす暴れん坊の双子、トゥルルとトゥルムだ。

ある日リーセとブッレは、プロクトル博士がおなら薬を作るのを手伝った。早速ブッレを実験台に、おなら薬を試してみることにした。おなら薬は強力すぎて、ブッレは空高く舞い上がった！

リーセとブッレはこの薬を売って、プロクトル博士がお金持ちになれば、若い頃貧しいがために、父親からの反対にあい、結ばれることがなかったジュリエットという女性との恋を实らせることができるのではないかと考えた。ジュリエットの家はフランスの貴族の家系で、わけのわからない実験ばかりしているプロクトル博士とは家柄があわないと言われてしまったのだ。

3人が博士の家の庭でおなら薬を売っていると、噂を聞きつけた双子のトゥルルとトゥルムが、学校の帰り道にブッレを待ち伏せし、おなら薬をよこせと脅してきた。そこでブッレは知恵をしばり、おなら薬をあげるから、しばらく大人しくしてくれるよう2人を言いくるめた。

双子達が大人しくなり、よかったよかったと思っていたところに、また新たな問題が発生した。下水道に、お腹を空かせた危険な巨大蛇アナ・コンダがあらわれたのだ。アナ・コンダは、小さい頃は双子のトゥルルとトゥルムの父親、トレーンさんの



ペットとしてケージの中で飼われていた。しかしトレーンさんは、アナ・コンダが大きくなると、手に負えないと、下水道に捨ててしまったのだ。

トレーンさんは博士とブッレが、違法薬物を売っていると警察にデタラメな通報をしたことで2人は刑務所に入れられてしまった。ショックを受けていたリーセだったが、偶然双子達が、博士の実験室に忍びこみ、父親のトレーンさんに盗んだおなら薬の特許を申請してもらおうと話しているのを聞いてしまった。そのことをリーセから聞いたブッレは、刑務所から脱走する計画を立てた。体が人並みはずれて小さなブッレがおなら薬を飲み、刑務所のトイレにもぐりこめば、下水道に流れ着くだろうと考えたのだ。しかしブッレは下水道でアナ・コンダにあい、のみこまれてしまった。



リーセはおなら薬を、飲むと体が蛍光に光る薬にすりかえておいた。特許許可局に行ったトレーンさんは、おなら薬の効果を見せようと薬を吞んだが、体が蛍光に光ってしまい、申請を受け付けてもらえなかった。

双子達が博士の実験室からおなら薬を盗み出したことをリーセが警察に伝えたことで、トレーンさんは、プロクトル薬がつくったおなら薬の特許を横取りしようとした罪で逮捕された。

その頃ブッレはアナ・コンダの胃の中で、もうこれでおしまいだと希望を捨てかけていたところだった。ところが、その時、ブッレの頭におなら薬のことが思い浮かんだ。おなら薬を飲んだブッレは、アナ・コンダの口から外に飛び出し、その日開放記念日のお祝いでもちようどマーチング・バンドの行進をしているところだった双子の兄弟に、突進した。

プロクトル博士の売っていた薬は違法薬物ではなく、おなら薬であることが証明され、博士は釈放された。博士の釈放を祝うかのように、マーチング・バンドに加わったブッレの高らかなランペットの音が町をこだました。

プロクトル博士は若かりし頃の恋人、ジュリエットに会いに行くことになった。リーセとブッレはバイクでフランスに向かう博士に手を振り、送り出した。

リーセは、いつの間にか、友達が引っ越してしまった悲しみが癒えていることに気がついた。だって今のリーセの隣には、小さな赤毛の頼もしい親友がいるのだから！





ヨー・ネスビュ/ジョー・ネスボ（英語圏ではそう呼ばれていると本人がラジオで言っている。<http://gu.com/p/3pcy2/stw> 英語）

『スカンジナビアのミステリー王』と呼ばれる有名なミステリー作家。

(<http://www.jonesbo.com/>より)

スピーディーなストーリー展開が持ち味。2007年に発表された本作は、人気を博し世界22カ国に版權が売れている。この続編の”Doktor Proktors Tidsbadekar”（プロクトル博士、不思議なお風呂でタイム・スリップ）はすでに発売されており、さらに2010年の秋には3作目が発売された。

書評では、ロアルド・ダールをひきあいに、発想のとっぴさ、意外な結末、確かな文章力が賞賛されている。本作は1作目とともにノルウェーの大きな児童書賞のShort Listに入った。

(<http://www.salomonssonagency.se/php/author.php?lang=en&authid=34>より)

<http://www.youtube.com/watch?v=EsXxsChzNX4z>（英語）で作者が本シリーズの1作目について語っている様子を見ることができる。そこでは、子どもに向けて書くことと大人に向けて書くことは基本的には同じ作業であり、「良いお話」を書くことが共通して求められると語られている。作者は娘さんに物語をつくらせて読み聞かせをしたことが何度もあるらしく、「相手が子どもだろうと、つまらなければつまらないとはっきりと態度で示される」と語っている。

<http://www.youtube.com/watch?v=3582bgy7Abk&feature=channel>で作者はロアルド・ダールの所有するアパートに暮らしていて、夏になるとそのアパートの下の階にダールが滞在していたこと（ダールの両親はノルウェー人で）、また彼の作品の大ファンであることなどが述べられている。

<http://www.youtube.com/watch?v=Ri5-RzmBYL8>でCMの映像を見ることができる。<http://gu.com/p/3pcy2/stw>では、児童書を書く方がミステリを書くよりも面白い。ミステリと児童書は書き方が別で、ミステリで様々な要素をまとめる時、オーケストラの指揮者になったような気分になる、とおっしゃっています。